

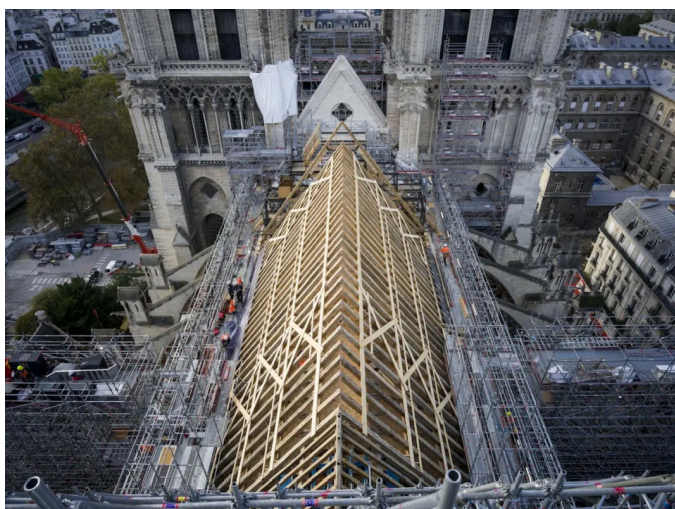
パリ通信・第146号

パリ・オリンピック2024

今日2月11日はル・コルビュジエが改造した船「ルイズ・カトリーヌ号」(通称アジュール・フロタン)がセーヌ川に沈んだ記念日である。積もった雪が凍った2018年の寒い土曜日だった。あれから6年、浮上はしたものの船は今も修復工事を待つ難破状態が続いている。2024年パリ・オリンピックには修復工事が終わり新たな文化施設に生まれ変わることを目指してきたが相変わらず資金調達の見込みが立たずプロジェクトは硬直したままで夢は叶いそうにない。

2019年4月15日火災が起きたパリ・ノートルダム大聖堂もオリンピック開催までに再建を目指しての工事が進んでいる。尖塔が焼け落ちた翌日から150の国を超える世界中から支援金の申し出が殺到し、8兆4600万ユーロの再建寄付金が集まった。5年の間に工事は順調に進み「フォレ(森)」と呼ばれる大聖堂

再建工事が進むノートルダム大聖堂



大聖堂「フォレ」

公式サイトより

の
木組みの屋根が出来上がった。尖塔を飾る「雄鶏」(96mの高さに十字架上に座する聖遺物)も昨年12月に完成した。国宝であるノートルダム大聖堂の再建を指揮する文化財主任建築家の下に、石工、大工、金属加工職人、ステンドグラス職人、パイプオルガン職人、飛び職人、工事現場監督、クレーン車運転手など再建を支える各界の専門家たちの技術と熱意で修復が行われている。最新の技術を導入し、何世紀も続く教会建築のノウハウ

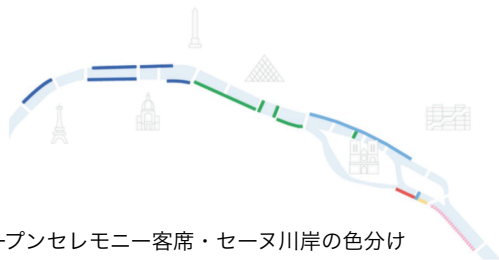
がしっかりと受け継がれている。7月26日パリ・オリンピック「オープニングセレモニー」までには終わらないだろうが再建は時間の問題だと思われる。

2024年はパリにとって歴史に残る年となるだろう。オリンピックまでに終わるべき工事でパリ全体が工事現場と化しているが、本数が少なく日常的に遅れやトラブルが絶えないメトロやバスがオリンピック時の観客数に対応できるかは至難の業だろう。オリンピックを理由に至るところで値上げが見込まれ、2024年は特別の夏になるだろう。そして何よりも心配なのが「セキュリティー」の確保である。戦争や紛争が続いている中でパリでも

テロ事件は珍しくなく、安全にオリンピックを開催できるかが問われている。際たる例が「各国選手団が船に乗ってセーヌ川を行進する」オープニングセレモニー(7月26日20:00-23:15)だ。アンヌ・イダルゴパリ市長の発案で2022年10月時点では60万の観客を入れる

予定だったが、今年に入って半分の32万人に縮小された。90€(立見席)(約1万5千円)から2700€(A席)(約45万円)までの6種類: A席2700€、B席1600€、C席900€、D席500€、E席250€、立見席90€の料金設定で右岸と左岸に振り分けたオープニングセレモニー券は

CAT A CAT B CAT C CAT D CAT E+ CAT E
EMBOUT / STANDING



オープンセレモニー客席・セーヌ川岸の色分け

ほぼ完売である。観客数を減らすだけで警備の問題が解決する訳ではない。昨年10月のハマス攻撃からはアメリカとイスラエルはセーヌ川入場行進を拒否する意向を示した。パリにもスタジアムはあり警備上は船よりずっと安全だが、すでにセーヌ川行進チケットは販売されていて払い戻しは問題だ。そ

こで折衷案として、10500人の選手団を乗船させる代わりに国旗だけを行進させる内容に変更されるようである(2月7日「カナール紙」による)。国旗だけの行進であれば200人足らずで済み、1~2隻の船で十分に用が足りる。オーステルリッツ橋からイエナ橋までの全長6kmのセーヌ川両岸、その間にある建物、窓、屋根の監視を僅か45000人の警察と警備員で行うのは大変なことである。この先も警備上の理由で変更や中止が行われる内容が出てくる可能性は大きい。



「ルイズ・カトリーヌ号」が係留されているオーステルリッツ岸は当初は各国選手団乗船の控えの場所に利用される予定だったが、入場行進を出来るだけ短くするためにオリンピック実行委員会からオーステルリッツ岸の利用はないと正式に通知を受けた。フェンスで囲った工事現場状態の船はメディアに取り上げられることもなく、オリンピックとは無縁の存在になる。オリンピックでその存在を広くアピールできると思ったが立ち入り禁止区として終わりそうである。

観客なしで行われた東京オリンピックから聖火を受け継いだパリ。フランスが誇るブランド「ショーメ」(「LVMH」グループ)がデザインし、エッフェル塔建立時のオリジナル鉄片が添えられるという「金・銀・銅メダル」を発表し盛り上がりを期待するオリンピック開催委員会だが一般市民の関心は低く開催までまだまだ混乱は続きそうである。

2024年2月12日 古賀順子記